

## 疫病と口承文芸

—イギリスの事例から—

美濃部 京子

### 一、はじめに

人類は紀元前の昔から様々な疫病に悩まされてきた。イギリスにおいては、十四世紀に始まる「黒死病」と呼ばれたペスト、十九世紀のコレラ、そして今回の新型コロナウイルス感染症が主なものである。また、イギリスには大きな影響はなかったが、第一次世界大戦中に流行したインフルエンザ（スペイン風邪）に関しても興味深い伝承がみられる。

本稿では、ペストをめぐる伝承を紹介し、コレラやインフルエンザをめぐる伝承の事例に触れつつ今回のコロナの流行から生まれる伝承の可能性について考えてみたい。

### 二、ペストをめぐる伝承

#### (ア) 伝説

かり留めた。すると布は次第に白から黄色へと変わった。賢者はそれを教会墓地におさめた。その布はそれ以来ずっとそこに眠っている。その場所にあの石が建てられたのである。<sup>(2)</sup>

目に見えないために余計恐ろしい疫病を目に見える形にすることで克服したというのが興味深い。もう一つの話は、ペストの流行の中で死神に会う話である。

前にエディンバラがペストに襲われたときは、通りに人影がみられなくなるほどひどい状況だった。医者や薬も間に合わずに死んでいく人が多く、わからないことが多い病であったが、一つ確かなことはこの病にかかった多くの人は側に誰もいない夜の間に死んでしまうということだった。

ある夜、ひとりの貧しい女がこの病にかかった階下の友人の様子を見に行こうとしたところ、友人の部屋から低いなり声が聞こえた。女が友人の部屋のドアに近づくと暗闇の中で何かとすれ違った。長い衣服が壁にこすれるような音が聞こえ、ランプの灯の中に背の高い男の姿が現われ、滑るように姿を消した。一瞬のことだったので、見間違いかと思ったが、友人の部屋に入ると彼女は死んでいて、自分は確かにその姿を見たのだと確信した。女がその話をひとりの医者にすると、女が見たのは死神の姿だったという迷信じみた考えが町中に広がった。

その二日後、近くのリース港に異国からの海賊船が入ってきた。リースもエディンバラと同じようにペストが猛威を振るっていた。海賊は市長に面会を求め、「自分たちはペストに効く薬

十四世紀のペストの流行では、人口の半分が死亡したともいわれ、大いに恐れられた。そのため流行が収まってからもペスト菌が残っているという伝説がみられる。なかには二〇世紀になってもペストにかかった人が埋められた場所で影響が残っているという話がある。<sup>(1)</sup>

スコットランド、ニグ(Nigg)の教会墓地の中ほどに飾り気のない石が置かれているが、管理人は決してそこに近づいて墓を開けようとすることはない。伝えられるところによると、ペストは船のような器に乗って運ばれてきて、地面の近くをゆっくりと飛びながら、小さな黄色い雲の形になった菌が解き放たれた。人々はその雲が大きくなるのを心配して震えながら高みから見ているが、やがてニグに住む賢者によって恐怖とペストから救われた。賢者は鳥をとる網のような大きなリネンの袋を持ち、注意深くその黄色い雲に近づいた。そして、その雲を全部袋に閉じ込めることに成功した。それから、それを注意深く包むと、何度も何度も折たたみ、ピンをいくつも刺してしっ

を積んできており、治療に長けた人材も乗せている。助かった人は財産の半分を差し出すという条件で、ここに残って病気の治療にあたってもよい」と言った。市長は、自分の娘が病気がかかっており、市民のことも大切に思っていたので、海賊の申し出を歓迎した。市長の娘の治療には、船の船長が自らあたることになった。

船長は娘に吉と出るか凶と出るかはわからないが、効果がすぐに現れる薬を与えた。そうして一晩中娘の部屋で見張っていることにした。部屋の隅に座っていると、真夜中近くになって何か黒い雲のようなものが彼とベッドの間に静かに現れた。それはかすかな音を立て、ぼんやりとした形をとって動いていき、ベッドの上で止まった。ベッドの患者はため息をつくと、規則正しかった息が止まったように見えた。船長は思わず声を上げた。するとすぐにその雲のような人影はベッドから離れると、はつきりした人の形になって、滑るように部屋から出ていった。船長はそれが死神だと思い、あとを追いかけた。細い路地を降りたところで月明かりの中で背の高い男が大きな外套に身を包み滑るようにノース・ロツホからマーティス・ヒルに続く小さな橋に向かっていくのが見えた。そしてそこで突然姿が消え、船長は一人残された。男の姿は跡形もなく消えてしまった。

船長は娘が死んでしまったものと覚悟して、患者の元に戻った。ところが、娘はすでに病から回復して元気になっていた。そしてその後まもなくペストは町全体で勢力を弱め始めた。悪

い悪魔が追い払われたのは勇敢で忠実な船長のおかげだと多くの人は信じた。船長と娘の間には愛情が芽生え、病が治るとすぐに市長の娘は異国の船長と結婚した。船長は海賊をやめ、長老派に改宗し、最後にはエディンバラに住居を構えた。<sup>3</sup>

現在であれば、顕微鏡でその病原菌の姿を見ることもできるが、当時の人々は姿の見えない病気を雲や人の姿でとらえ、それがなくなることで病気もなくなると考えたのである。

### (イ) バラッド

バラッドでは、疫病に関連して二人の娘の運命が歌われる。

ベシー・ベルとメアリー・グレイ

二人はかわいい娘だった

向こうの丘に家を建て

イグサで屋根を噴いた<sup>4</sup>

仲の良い二人は小屋を作って一緒に暮らす。一六四五年にペリスを襲ったペストから逃げて人里離れて暮らしていたのである。そこへ二人に思いを寄せる若い男が食料などを運んできていたが、病気もいっしょに運んできて、二人は死んでしまう。

二人はメスベン教会に埋められない

高貴な家族と一緒に

レドノッホの丘に眠るのだ  
太陽の光を浴びながら

二人が教会の墓地に葬られなかったのは、二人が同性愛者であったという説もあるが、先の伝説で見たようにペストにかかっていたからとも考えられる。この曲はイワン・マッコールやマーティン・カーシーなど現代のフォーク歌手も歌っているが、ナーサリーライム（童謡）にも入っている<sup>5</sup>。ナーサリーライムでは、二人が一緒に暮らしていたことを歌っているが、ペストを思わせるところはない。

### (ウ) ナーサリーライム

ナーサリーライムでペストと関連付けて論じられることが多いのが「バラの周りで輪になろう (Ring around the Rosie)」である。

バラの周りで輪になろう

ポケットには花束

ハックシオン ハックシオン

みんな倒れてしまったよ<sup>6</sup>

これは、子どもたちが手をつないで輪になって踊る遊び唄であるが、一六六五年のペストについて歌っているのだという説

がある。一行目の「バラ」は病気の症状である赤い発疹を表し、「花束」というのは予防に持ち歩いていた菓草の束を、「ハックシオン」は病気に伴うくしゃみを、そして最後の「みんな倒れてしまった」というのが病気がかかった結果必ず死んでしまうということを表していたというのである。これは俗説として人々に広く定着しているが、民俗学者たちはこれを否定している。

この説は二〇世紀になって初めて出てきたものであり、説の元になっている歌詞も新しいバージョンのものだけであり、古いものには「ハックシオン」や「みんな倒れる」という歌詞は出てこないからである。<sup>7</sup>

### 三、コレラからスペイン風邪

ペストに続き、イギリスでは一八三〇年代ころからコレラが流行する。このころはちょうど新聞が普及してきた時期と重なり、中央政府や地方行政体、新聞や雑誌により、大量の情報が市民に提供された。そしてそのためにかえって口承文化という伝統的なコミュニケーション回路のほうも活性化され、うわさが乱れ飛ぶことになったという。そして、口頭による意見の伝承が、疫病にまつわる暴動のきっかけになった<sup>8</sup>。

一九一八年、第一次世界大戦が終わるころに流行したインフルエンザ（スペイン風邪）は全世界で何千万人もの死者を出したとも言われている。この年にはアメリカの子どもたちの間で

こんななわとび歌が流行っていたらしい。

私は小鳥を飼っていた。

名前はエンザ。

私が窓を開けたなら、

入ってきたよ、エンザちゃん (in flew Enza)<sup>9</sup>

オーピー夫妻はこの歌を採録していないが、イギリスにはこの歌が伝わっていなかったのか、夫妻が調査を行った一九三〇～五〇年代にはすたれてしまっていたのか真偽のほどはわからない。オーピー夫妻は「時事ライム (topical rhyme)」というカテゴリーで、政治家や映画スター、有名な事件などを織り込んだ歌を採録している。中にはナポレオンを歌ったものもあるので、古い出来事でも子供たちが面白いと思えば、歌い継がれていくことがわかる。おそらく当時の子どもたちはインフルエンザには興味がなかったのだろう。アメリカの方でもこの歌に似たバージョンが一八九四年の時点で活字になっている<sup>10</sup>。おそらく一八八九年から一八九〇年にかけて流行したロシア風邪のときに歌われていた歌が一九一八年のスペイン風邪の流行で子どもたちの間で再びうたわれるようになった可能性がある。イギリスでもまたインフルエンザの流行があれば、歌の方も流行するかもしれない。

#### 四、コロナにまつわる伝承

さて、そして二〇二〇年、百年に一度とも言われる新型コロナウイルスウィルス感染症の流行が始まった。イギリスでは、三月からのロックダウンの間に様々な活動がみられた。毎週決まった曜日の決まった時間外に出て医療従事者への感謝を表して、みんなでそろって拍手を送ったり、鍋や鐘を鳴らしたりする。感染流行の収束を願って虹の絵を描いて窓際の表から見えるところに貼る。コロナの流行の中で人々は新しいフォークロアを作り出しているといつてよいだろう。

こうした新しいフォークロアを収集しようというプロジェクトが始まっている。スコットランドのアバディーン大学のエルフィンストーン・インスティテュートでは、「ロックダウン・ロア収集事業 (Lockdown Lore Collection Project)」と称して、この時期に生まれた伝承を記録して後世に残していこうという活動が始まった<sup>1)</sup>。ロックダウンがふたたび続くなか、街へ出てフィールド調査をするのも難しい状況であるが、大学はホームページの投稿フォームを通して一般に広く募集するという形をとっている。現在特に力を入れているのが、

1. 感染流行に対する手作りのモノ
2. ロックダウン下の生活のハナシ

#### 3. 歌や音楽

#### 4. 詩

#### 5. デジタル活動の取り組み

である。こうした実例を写真に撮って送ってもらったり、話のテキストを送ってもらい、場合によってはオンラインでインタビューをしたり、少数のチームで個人的に話を聞きに行くこともある。歌や音楽についてはビデオや音声を送ってもらう。詩についてもテキストで送ってもらうだけでなく、ビデオや音声も受け付けている。

全く新しい伝承形態と言えるのがデジタルな取り組みである。ロックダウンの中で人々が共通のデジタル空間に集まって何かをする活動である。例えば#CovidCaitch (コロナケイリー) などのハッシュタグを通して大勢で会話を楽しむ (ここでいうケイリーとはゲール語で歌や踊り、語りなどを楽しむパーティーのようなものである)。Zoomなどのビデオミーティングアプリを使ってワークショップなどを開く。こうした活動は、データベースにして公開されており、興味を持った活動にだれでもアクセスできるようになっている。

このアバディーン大学の事業はまだ始まったばかりであるが、最初の手作りのものに関しては写真の一部が公開されている。話や歌、詩などについては、その内容はまだわからないが、今後の公開が待たれるところである。

#### 注

- (1) Briggs, Katharine *A Dictionary of British Folk Tales*, pt. B, vol. 2, 1970, p.377
- (2) Hugh, Miller, *Scenes and Legends*, p.245. Briggs 前掲書 p.377 に "Trapping the Plague" という所収。
- (3) "The Plague in Edinburgh." Chambers, Robert. *The Book of Scottish Story*, pp. 104-9. Briggs pp. 569-579 所収。
- (4) "Bessie Bell and Mary Gray" (Child 201) Scott, Walter: *Minstrelsy of the Scottish Border*, I, p.26. Briggs, p. 161 所収。
- (5) Opie, Iona and Peter Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book*, 1955, p.201. 同じくは二連目は「メシーは門を守り、メアリーは食物庫を守った。メシーは少しも待たされたが、メアリーは裕福に暮らした」と続く。
- (6) Ferguson, Diana. *Ring a Ring o' Roses: the Origins and Meanings of Old Rhymes*. 2019, p.75.
- (7) 同書 七八ページ。
- (8) 見市雅俊『コレラの世界史』二〇二〇 晶文社 一三八～二四〇ページ。
- (9) Yannucci, Lisa. *Mama Lisa's World: International Music & Culture*. Web <https://www.mamalisa.com/?f=es&p=3171>
- (10) Opie, Iona and Peter Opie. *Children's Games with Things* (1997) ほか
- (11) Opie, *The Lore and Language of School Children*, 1959, p.98-  
(12) Yannucci, 同上 *Massachusetts Reformatory: "Our Paper"* vol. 10 (1894) に次のようなバージョンが掲載されていると述べている。  
少女がいて、小鳥を飼っていた  
少女は小鳥をかわいい名前エンザと呼んでいた。  
ある日小鳥は飛んで行ったが、長居はしなかった  
少女が窓を開けると、エンザが入ってきた (In-the-Enza)
- (13) The University of Aberdeen. Elphinstone Institute. "Lockdown Lore" <https://www.abdn.ac.uk/elphinstone/public-engagement/lockdownLore.php>  
(みのへ・きょう) / 静岡文化芸術大学